

## 「50周年へのメッセージ」

大貫耕一（東京支部）

### 1. 上本町ハイハイタウン

私にとっての大阪は、上本町ハイハイタウン周辺です。新大阪駅から御堂筋線に乗り、なんばで千日前線に乗り換えて谷町9丁目で降り、地下通路を歩いて美味しいハイハイタウンへ。この経路は目をつぶっても行けるくらい通いました。

現在のホテル・アウイーナ（旧なにわ会館）に宿泊して教育会館で研究会に参加するか、ハイハイタウンから歩いて吉野旅館で教育課程試案作成会議に参加するかが、私にとっての「大阪」でした。

このため、大阪の思い出はハイハイタウン周辺にほぼ限られます。研究会や会議が終わった日曜の昼は中華でした。店に10名ほど入り、円卓についてビールと餃子を頼むと、ビールとともに餃子がすぐに出てくるこの「早さ」にビックリ。安武さんに「事前に作っているのでは？」と聞いたのですが、「注文を受けてから作ってるのや」とのこと。大阪での食事は「いつも早い」のです。

☆プロジェクト【教師と子どもが創る体育・健康教育の教育課程試案 1巻 2巻】はCDになっていますので、HPで申し込んでいただければ入手できます。

### 2. やりきる大阪支部

体育同志会において、大阪支部の存在は「重い」と常々感じてきました。

第1に組織基盤の強さとしての「会費徴収」。「会費を納めることが会員の証」という考え方があるためでしょうか、「しんどい会費徴収」を集めること・支払うことに取り組まれています。この「会費」が組織の一員であることの自覚につながり、支部組織の基盤となっているのでしょう。

第2に研究活動における「会場確保」。研究会のために、常に使用できる会場を大阪支部ではもっていません。研究会を行うために、担当者はまず「しんどい会場確保」をしなければなりません。会場を確保して研究会の準備をすることによって、研究会参加の意思と参加者を募りたいという思いをもつことになっているのでしょう。

第3に組織発展における「人事の刷新」。組織にとって「継続は力」であるとともに「新陳代謝」は欠かせないことでしょう。どのような組織も、権威性・保守性が時間の経過とともに頭をもたげます。大阪支部では、この新陳代謝を常に断行しようとすることで、組織の若返りと発展のめざしているのでしょう。

この他にも、「新しい研究成果・実践への着目の早さ」や「地道な実践研究活動」など、大阪支部の研究・組織活動は、体育同志会の在り方として重い影響を与え続けています。

最後に、50年目以降の大阪支部への期待です。これまで大阪支部は「競争研究」「グループ学習研究」「健康教育研究」などの輝ける研究成果を創出してきました。これらの成果が生まれたのは「現場に立脚した発想」と「将来への見通し」があったためでしょう。大阪支部からの今後の発信を期待しますし、そのために全国の仲間との協同探究を進めていきましょう。